



婦人
と子ども

第四卷第八號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざることを。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たい雜誌だけ買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十七年八月二日印刷
同 年八月五日發行

不許
複製

發行兼編輯者 東京市神田區西小川町一丁目一番地
 印刷者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
 印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
 發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
 發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
 金昌堂

大賣捌所 東京 東京堂 ● 同東海信文合資會社 ● 同北隆館

婦人と子ども 第四卷第八號目次

子ども

鐵橋破壊……………やまとの翁……………一

いそぶ物語…………………………一五

お笑ひ草…………………………一六

婦人と子ども

家庭の音楽……………牧……………羊……………一八

氣質について……………松本孝次郎……………三

自然物の色……………かはむら……………三五

割烹……………石井泰次郎……………三〇

略製アイスクリームの拵方
略製スチューエツクスの拵方

家庭に於ける所感……………飯塚忠次郎……………三三

雜感……………平岩繁治……………二

和歌七首……………佐々木信綱……………七

瀧廉太郎の君の一週忌に……………東……………くめ子……………一六

松島に遊びて紅蓮女が事を思ふ……………小林雨峯……………二六

フレールバル會俳句端書集……………鹽野奇零……………三三

海水浴に就て…………………………四〇

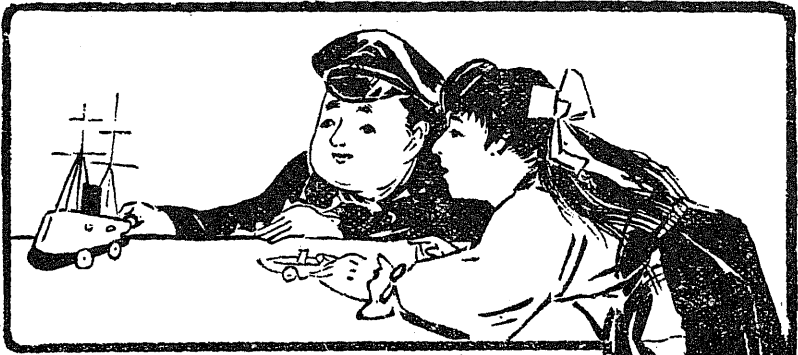
貞一の日記…………………………その……………母……………四六

女子高等師範學校分室…………………………五二

市川君の批評に答ふ……………東……………基……………吉……………五五

雜報…………………………五九

●大阪市保育會●會報



もど子と人婦

號八第卷四第

鐵橋破壞

やまとの翁

さても、我が勇武なる皇軍の向
 ふ所、攻めて抜かざるはなく、
 戦うて勝たざるはなく、さしも
 に、難攻不落と頼んだ敵の要塞
 旅順口も、一月ばかりの重圍の

後、我が陸海軍の總攻撃に由つて、僅かに一日の中に、敵艦隊
 は全滅し、要塞内三萬の敵軍は、或は戦死したり、或は白旗を持
 つて、或が軍門に降参を願ひ出で、是に全く陥落し要塞の各砲
 臺には、今は旭の御旗が幾流となく、海風に翻へつて居る。
 之より前、敵の大將黒鳩公は、部下の名將、スタケルブルグ中將
 をして、二師團の兵を率ゐて、旅順の危急を助けにやつたのであ
 るが、我が奥將軍のために、得利寺といふ所で、散々に打ち破ら
 れて逃げて歸つたのであった、我軍は逃ぐるを追うて、蓋平を拔
 き、營口牛莊を取り、遂に、大石橋に、黒鳩公の大軍を物の見事
 に撃退したのは、丁度、旅順口の陥落に先きたつ事、一週間程で
 あつた。そこで、遼東半島は、もう悉く日本の占領する所となつ

て、露兵の片影だも見る事は出来ない。

旅順の陥落、大石橋で黒鳩公の大敗の報知が、露都に聞えると、さあ上も下も大變な騒ぎとなつて、大急ぎで以て、先づ二十萬人の援兵を送つて、黒鳩公を助け奉天附近で、勝ち誇つた日本の大軍を支え、こゝで一大激戦を試みて、連敗の大勢を盛り返さうといふ計劃を定めた。

黒鳩公は、大石橋で大敗してから、殘兵を引きつれて遼陽をすて奉天に退き、こゝに各所の敗兵大凡二十萬人許りを集中し、連勝の日本軍と一大決戦をやらうとするのであるから、夜を日についで、地雷だの、鹿柴だの、鐵條網だの掩堡だの、さまざまの防禦工事を急いで、一方に於ては、本國から來る二十萬の援兵を今か

く　と待　つ　て居　る。

我　が　軍　は、第　一　軍　は　右　翼　に、第　二　軍　は　左　翼　に、第　三　軍　は　中　軍　に　備
 へ、其　兵　合　せ　て　三　十　万　人、遼　陽　を　中　央　と　し　て、右　は　太　子　川、左　は
 遼　河　の　域　に　沿　う　て、蜿　々　と　し　て、長　蛇　の　如　く、天　を　衝　く　が　如　き　意
 氣　を　以　て、奉　天　の　敵　本　營　を　壓　し、機　を　見　て、三　面　一　時　に　合　撃　し　よ
 う　と　す　る。

開　戦　以　來　の　連　敗　に、三　軍　の　意　氣　甚　だ　し　く　消　沈　し　た　り　と　は　い　ふ　も　の
 へ、元　來　世　界　強　大　國　の　隨　一　と　い　は　れ　た　露　國　軍、嘗　て　は　自　分　か　ら　都
 を　焚　い　て、世　界　の　一　統　を　企　て　た　ユ　ル　シ　カ　の　英　雄、彼　の　奈　破　翁　を　さ
 へ、苦　も　な　く　大　敗　さ　せ　た　位　だ　か　ら、其　意　氣　の　今　で　も　尙　失　せ　な　い　も
 の　が　あ　る。殊　に、此　決　戦　に　敗　れ　た　と　來　て　は、亞　細　亞　の　方　面　で　は　勿

論の事、多年雄視した歐羅巴での位置も、全く失つて仕舞はねばならぬ事であるから、この戦こそ、眞に、露國の全運命の係る所といふので、夫はく非常な決心なものである。

日露の大軍は、かくて兩々相對峙し、危機一髮滿州の大平野は忽ちの間に、修羅の巷にならうとして居る。

かゝる間に、某月某日を以て、露本國からの援兵二十万人ハ爾賓に到着するといふ事が分つた。夫で、此援軍が、奉天に着かない中に、一舉して、敵を鏖殺にして仕舞はうといふ目的で、我軍は、敵援軍のハ爾賓に到着する數日前に總攻撃を開始した。そこで、兩軍、五十萬、前古未曾有の大激戦が始まつた。敵も數に於ては少いが、此一戦で、開戦以來連敗の大勢を盛り返さうといふ決心

である上に、防禦工事は中々嚴重に出来て居るので、其抵抗は頗る頑強を極め、容易に陥落し相にもない、かくして、彼は、本國からの援兵の到着するまで、陣地を固守しよ

うといふのである

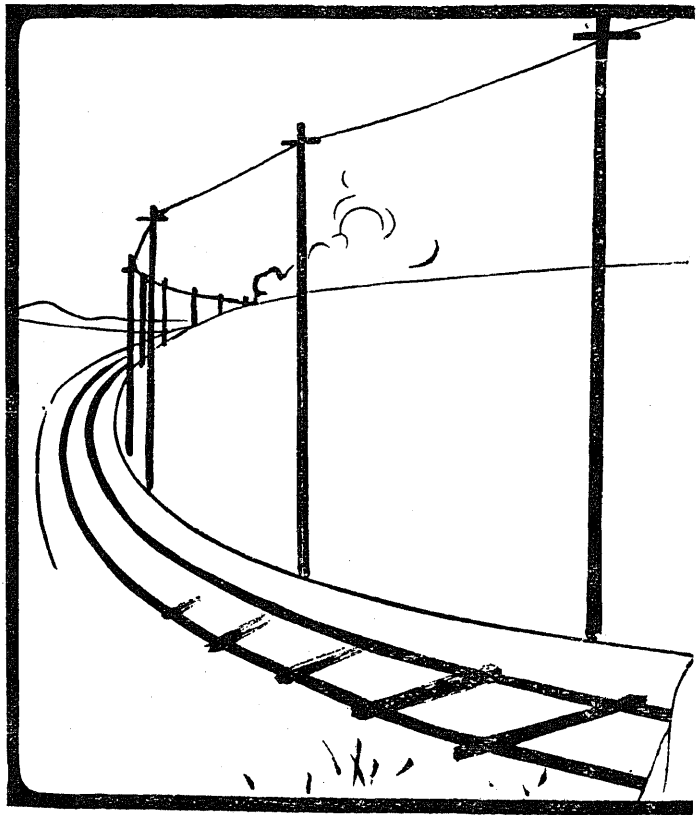
* * * * *

此大戦争が始まる數週間前に、北京から汽車でやって来て遼河の上流で、下りた二人の支那服を着た僧侶が在った。



大
其抵抗は頗

大抵は無言で歩いて居るが、物言ふ時には巧みな支那語を使つて居る。知らない西洋人等が見ると、誰でも、支那の僧侶だとしか思はないが、其炯々たる眼光、其眉宇の間に溢た敢爲の氣象等から見るとは、吾々日本人には、誰でも是は、尋常の支那の僧侶でないことが分る。さて、此二人の支那僧は、哈爾濱の方向に向つて、鐵道に沿うて、



しきりに道を急いで居る、尤も途中、至る所で、露西亞の哨兵から、再三咎められたが、いつも、布教の爲め、滿洲を旅行する僧侶だといふので逃れて居る。やがて、日數過ぎて、或日の暮れ方遂に、松花江の鐵橋に到着した。

此松花江といふのは、滿洲中での大河で、北に流れて、黑龍江に入つて居るが、哈爾濱から旅順に至る汽車は、この鐵橋を渡つて居る。彼の二人の僧侶のこゝに到着した晩は、正に奉天附近で、彼我五十萬の軍勢が、入り亂れて、烈しく砲火を交へて居る時であつた。僅か、二三十里を隔て、南には、あまたの人々が、互に生命の取りやりをして銃砲の響や、劍戟の光り凄まじい有様であるにこゝ滿洲の平野を流るゝ、松花江の夕景色ののどけさ、沈んだ

夕日の影で紫色になりかゝった向うの森に向って、夕鳥が二三羽飛んで行くのがあると、近く足許の芝生の上には、四匹五匹の豚や牝牛が牧童に引きつれられて、家路に急いで居る。彼の二人の僧侶は、こののどかな自然の景色を見て、暫しは深き感慨に沈んで居た様だったが、やがて、進んで行くともなく、引き返すともなく、其邊を徘徊して、夜の深くなるのを待つて居る様であつた。

其夜もやうやう更けて、一時頃、鐵道線路警戒の役目を以て鐵橋附近を巡廻して居った一人の露國憲兵が、闇をすかして遙か向うを眺めては耳をすませて居たが、何を見つけたのか、ポケットから、呼子を出すや否や、狼狽たゞしく吹き立てた。夫といふので



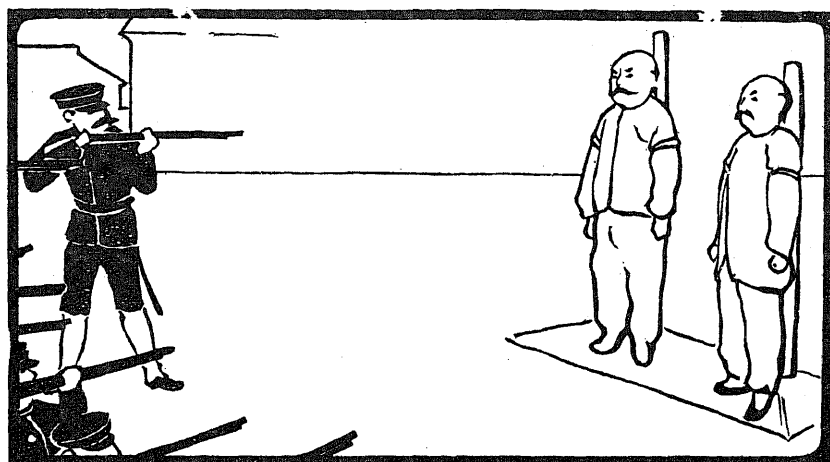
そこ、こゝから、二人三人づゝ
 の憲兵が顯はれて、忽ちの中に
 二十人餘り、闇を破つて怪しの
 者を追つかけた。

* * * * *

丁度、其時、哈爾賓を發した汽
 車は、數十の客車に、幾万の兵
 を搭載し、この鐵橋に向つて進
 行して來た、この兵といふのは、
 即ち露本國から發した二十万の
 援兵の先發隊で、今や哈爾賓か

らして彼の奉天の合戦の眞最中に向つて進軍して來たのであつた。
 やがて、松花江の鐵橋まで來て、機關車は、今や此方の川岸に付
 かうとした時、爆然として、天地も破れん許りの響と共に、鐵橋
 は眞中から眞二つに割れたと思ふと、續いて、幾十の客車は幾万
 の兵隊を搭載したまゝ、轟然と、川の眞中に、折り重なつて落ち
 こんで仕舞つた。

奉天の露軍に於ては、しきりに援兵の來るのを頼みにして、我が
 大軍を引き受けて防いで居つたが、何時までたつても援兵は到着
 しない、其中に、各砲臺は、だんくに略取せられる、とうく
 力屈して、丁度、彼の汽車顛伏の起つた翌日の晩、全く、陣地を



棄て、潰散した。我軍は、三面とも
 どこまでもと、追撃したので、露軍の
 斃ゆゝもの數を知らず、捕虜は師團長
 以下將校數百名、下士以下は無數、敵
 將、黒鳩クロストウキン公もやつとの事で哈爾賓まで
 逃げ歸つたといふ古今無比の大勝利と
 なつた。

* * * * *
 この戦争が濟んでから、大方一月も過
 ぎて、哈爾賓の露の本營の軍法會議に
 附せられた、二人の支那僧があつた。

二人とも、彼の恐るべき汽車顛伏の際、露國憲兵に捕まつて綿火薬を装置して鐵橋を破壊したといふ嫌疑で以て、こゝに送致せられて、嚴重なる軍法會議に附せられることになつたのである。この鐵橋破壊、列車顛伏によりて、多數の兵士を川底に葬つたのみならず、本國からの援兵をして、奉天の大激戰の機に後れしめ、従つて、露の滿洲軍は恢復すべからざる大敗北となつたのであるから、この二人の僧侶の行爲は非常に重大な犯罪だと考へられた。最初は、露國の役人どもも、皆支那人だと許り思つて居たが、だんく取調べた末、どうしても、日本人に違ないと斷定せられた。

然し、この勇敢なる二人の日本人は、如何なる取調を受けても、

どこまでも知らぬ存ぜぬで通しきつたので、この取り調べは遂に
 分らずに終ったが然し、鐵橋破壊だけは二人とも最初から申し
 立てゝ居るのだから、然らばといふので、遂に死罪に決められた、
 夫でも、何れ、日本の豪い志士に違ないからといふので、將校の
 禮を以て、某日遂に銃殺の刑の下に、此二人は從容として、奉天
 の大勝利を祝し、大日本帝國の萬歳を唱へながら死に就いたとい
 ふ事である。

いそつぶの話

鷲と矢

一羽の鷲が、高い崖の上に止つて、一匹の野兔を狙つて居りますと、獵夫が其後に隠れて居て、弓に矢を番つて鷲を射ると、狙違はず鷲の胸に當りました。鷲は射られたまゝ、不圖其矢を見ると、矢の羽が、同じ自分の羽から出来て居るので、思はず次の様に叫び出しました。「己の羽で拵らへた矢で、己の生命を取られるとは、よく〜残念で堪らない」

旅順口で戦死したマカロフ丁督によく似てるではありませんか

獅子と野猪

ある夏の暑い時、一匹の獅子と野猪とか、何方も喉が渴いて耐らないので、小さな井を見付けて、

水を飲みに来ました。然し、誰が先きに飲むかといふことで議論が起つて、中々容易にきまらない。とうとう二人で烈しく立ち廻つて、噛み合を始めた。すると、上の方で、鷹が一羽飛び廻はつて居て、此喧嘩を見て居ます、そうして、どつちか一匹殺されたら、其肉の御馳走にありつかうとして待つて居ます。之を見て二人は、忽ち噛み合を廢めました、そして言ひますには「鳥や鷹の餌食になるよりは、いっそ二人で仲直りをしようじゃないか」

馬と影

旅客が、道を歩いて居って、餘り疲れたからといふので、馬を雇うて乗つて行きました。所が、丁度此頃の様暑い時でしたから、頭から日さんに照りつけられて、とても耐らないといふので、とうとう馬から下りて、其馬の影に座つて休まうとしま

した。然し、其影は狭いので、旅人が這入ると馬子が這入ることが出来ません、そこで、己が這入るのだ。いや己が這入るのだといって、二人の間に議論が始まりました。つまり馬子はこういふのです、「一体、馬を借りたいといつたから馬丈けを借したので、影までも一所に借しはしなかつた、だから、馬の影は、當然、こつちが使ふ権利があるのだ、」すると、旅人は、「いや、元來影は當然馬に附いて居るものだ、だから、既に馬を借りた以上はどうしても、影を使用する権利は、己の方になくしてはならぬ」こんな具合に、議論をして居たが、とうとうお仕舞には、議論に花が咲いてなぐり合になりました。其間に馬は、何處かへ駆けて行つて仕舞ひました。

蟻と鳩

一匹の蟻が川岸へ行つて水を飲まうとして居た所を急に波のために、流されて、今にも溺れ様として居ました。すると、其川の上に、かぶさりかゝつた木の枝に、一羽の鳩が止つて居て、其蟻の溺れて居るまゝ側へ向つて、一枚の葉を落してやりました。蟻は、地獄で佛の思をして、やつこの事以其葉に這ひ上つて、無事に、川岸に漂着して、危い所を助かりました。夫から暫くして、此鳩が、或る木の枝に止つて居ると、一人の鳥さしが、竿の前にモチをつけて、下から、そいつとさそうとして居ると、彼の蟻は、夫と知つて、其鳥さしの足に思いり食ひ付きましたから、鳥さしは吃驚して、竿を投げる、其拍子に鳩は飛んで行きま

お笑ひ草

一、火事にラムチ

或時のこと、何處かに大火事が出て、とうとう眞向うの大きな家の棟に火が付いたので、消防夫どもは、一所懸命になつて、働いたが、火の手は益々強くなる許りで、中に消え相にもない。所へ、近所の水屋の主人が走つて来て、いきなり懐中から、小さな瓶を出して、棟の火を目かけて、瓶の中の水を注ぎかけると、忽ち棟の火は、バツタリ消えて仕舞つたので、消防夫どもは驚いて「もし水屋さん、一體夫は何ですか」と尋ねると、「なーこれや、ラムネですよ」と答へる「へー、ラムネですか、えらい方のものですな」「さようさ、棟(胸)のやけるには、ラムチは、一等でありませんか」

二、師直の墓

浅野内匠頭の墓は、芝の泉岳寺に、大層立派に出來たのに、師直の墓は、まことに小さくて參詣人も少いから、師直の方のお寺の和尚が、これは少し氣の毒だから、せめて、石塔だけでも大きくして上げ様と思つて居ると、或夜のこと、師直の幽霊が和尚の枕もとへ出て來て「此度、己の石塔を立て直してくれるのは辱じけないが、どうか夫丈けは、見合はせてくれ」といふから和尚は「夫でも、浅野内匠の方の方は、あんなに立派に出來て居るに、あなたの方の方は、如何にも小さくて、見すばらしいから、せめて、大きな石に建て直さうと孝へますので」といふと、幽霊は、急にブルブルと身震をして「わゝ夫だゝ、其大石には、もう懲を致したのだ」



家庭の音楽

人の音楽を嬉む情は、以て生れた天性であつて言はば自然の本能である。故に、生れてから、數週間も経つた常態の子供であつて、音楽の愉快を感じない者はない。心理學者の説に依ると、生れて僅か二週間経つた子供が、耳を傾けて隣室のピアノを聞いたといふ位で、六七週間も過ぎると、樂器や唱歌を聽かせる時、手や足などまで動かして喜んで居るのは、子供を持つた人の經驗する所であらう。若し、彼の單純で、粗朴で、愛らしい子守歌といふものがなかつたならば、如何ばかり幼兒社會は殺風景になつ

て仕舞ふ事であらうか。「坊やのお守りは何處へ行つた」や、「坊やは善い子だねんねしむ」の歌などが、どれ程、小さい彼等の胸に、美の福音であり、喜の慰安となるのであらうか。彼の有名な音楽の大家のモツアートといふ人は、小さい時、毎夜、お父さんと唱歌してからでなくては、決して眼に就かなかつたといふ話である。

斯様に、極早い子供の時分から、人の心に備はつて居る音楽の本能の教育は、餘程早くから大切に考へられた。今を去ること、二千五百年も前に於て、彼の希臘の雅典に在りては、人の精神を高尙にし、之に慰安を與へ、物事の秩序規律などを愛する習慣を得しめるといふ考から、盛に音楽の教育に力を盡したが、全じ國の斯巴兒多に在つては、これは、非常な軍事教育を主張したのであつたが、夫でも、愛國の情を喚起したり、忠魂義膽を養成せんが爲めに盛んに少年の唱歌音楽に力を用ひたものであつた。そして、此二國とも何れ劣らぬ強國となつた事は、歴史上名高い話である。

か様な次第で以て、近頃に至つては、何處の學校でも幼稚園でも、音楽唱歌といふものは、缺くべからざる教科となつて居るのである。

かゝる音楽の教育上の功果に申すまでもない事であるが、ざつと一言して見ると、

第一、心情を快給にするのである。面白からぬ心の屈托でもある時、愉快な唱歌でも歌ふ、勇壯な曲でも聴く、精神忽ち豁如として一切の憂鬱煩悶を洗ひ去るのである。

第二、美情の養成である、美しい繪を見たり、音楽を聴いたりする事は、美の嗜好を長じて、精神を高尙ならしめ優美ならしめるのである。

第三、同情心を養成するのである。唱歌を歌つて、英雄の心を動かしたとか、無情の動物まで感じさせたとかいふ話は、古い歴史に澤山ある事でないか、唱歌が人の感情を動かす方は極めて著るしいものである所から、つまり他人の苦や悲に對する深い同情の心は、第一番に之で養はれる、殊に、大勢が一所になつて歌ふ時などは、其一所に歌ふ人々の心を結んで一とし、所謂共同和樂の感情を甚だ強固にせしめるのである。

そこで、以上述べた、人間固有の本能から見て、音楽の教育上の効果から見て、余は、我國の家庭に是非とも、此音楽の輸入を主張するのである。實に家庭は兒女本然の教育所である、家族の慰安所であつて、活動力の兵站部である。子女の教育の中で家庭の教育が最も大切で自然であつて見れば、此家庭教育の場所に於て、先天的に子女の嗜好に適合して居る音楽を用ゐないといふのは、甚だ意を得ないと思ふ。又家族の者に取つては、家庭は、實に社會の風波を避くる港である、砂漠中のオアシスである。吾等は此處に、風破の危険をも避け、砂漠旅行の疲勞と饑餓とをも満足させて、更に新らしき前進の勇氣と活動力とを恢復する根據地である。社會に出で、吾等が遭遇する幾多の失敗も幾多の煩悶も、此處に來ては見事に修繕恢復せられなければならぬ。此點から見て、家庭に音楽の輸入のどれ程効果があるか

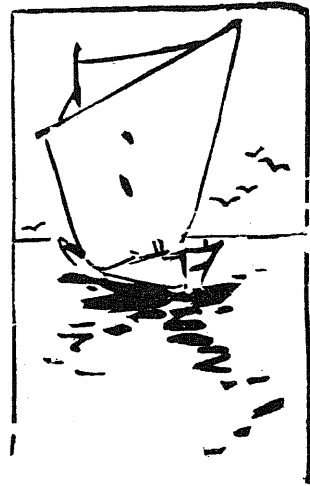
い知れよう。

一週一度の土曜日の夕、日曜日の朝、さては、毎日の夕食の後、或時間を定めて父も母も姉も妹も小さい弟に至るまで、オルガン可なり、グイオリン宜し、ピアノ大に可なり、一様に其側に集つて合唱する習慣にしたならば、全家族の心を結んで一となし、和樂團樂の情を一層強からしめ子女教育の上に於ては勿論、家庭をして神聖なる慰安所たらしむる上に於て、最も有功なる方便とならう。

若し夫れ、各家庭に於ては、各自、好む所に従つて、一定の家庭歌といふものを定めて、之を祭日に唱ひ、父母子女の誕生日に唱ひ其他家庭の祝ひ日に唱ふ用に供するが如きは、最も趣味ある事と思ふ。

此の如き事は、別に大した費用も要らないで、其實行も、今時の教育を受けた主婦に取つては、極めて容易な事と考へる。余は、彼の家庭の改良を叫び、理想の家庭を唱導する所の人々が、何故、この趣味あり、有益なる、且つ、實行し易き方法の輸入を計らずして、徒らに不合理なる夫婦同權論などを振り廻はして、結局、其理想を實現する能はざるのみならず、反つて、屢々、悲惨の境遇を演出して省みざるかを怪むのである。

(牧羊)



氣質に付て

松本孝次郎

氣質を研究するといふ事は昔から大事に考へられて居る。一人の人間の人物といふ事の大部分は其氣質に由て定まるからである。而して學者は大抵感情の部分に於て論じて來たけれども感情のみに由て氣質が定まるものではない。知情意身体の状況等によるのである。恐らくは胎兒が母胎内に居る時に母親の受くる影響に由てそれ／＼胎兒に關

係するので母の身体精神の状況に由て氣質に影響するのである。生後は育て方家庭の境遇等により氣質が違て來る。さて氣質といふ事に付ては古來有り來りの分類の仕方を考へ且つ深く今の分類に付て考ふべきである。古來の分類の仕方は中々廣く社會に行はれて居る。それは多血質、粘液質、神經質、膽汁質等である。之を知らぬと氣質の話はできぬやうになつて居るが此四は各特點を有て居る。しかし子供を觀察して其氣質を表はす時に此四の内のどれにしてよいか分らぬ事が常であるして見ると此分方はもつと改良しなければならぬもつと精密に言ひ表はしたいといふのに下の如くに分けるのでどうであるうか。

一、感動的氣質　感動の深い氣質を言ふので何か言はれると直ぐ氣にかけるとか泣き出すとか凡

て感動し易いものである。但し此内に又三種ある。

(イ) 非常に感ずる事強く知力作用弱く實行の力少なし。即ち意志の力の弱いもので感動的の中の劣

等のものである。

(ロ) 感ずる事も強く知力も中々よくはたらく。只意志はあまり強くない。

(ハ) 感動強く知力は事柄に由てよくはたらく。たとへば講ならばよく書けるとか音楽が巧であるとかで活動も少しはする。けれども之は鍍金なので

土台は活動ざらひであるのに情の爲に一時活動するので意の活動ではない。大人では文學者畫家音楽家などにあるので之等は勉強しだすと非常にす

るので全く情に驅られるのである。

二、活動的氣質 自分ではたらくを好むので常に何かをして居るものである。

(イ) 知力があまりはたらかぬけれども何か活動して居るので大人で云ふて見れば幹事に適するとか

世話役に適するやうな人である。

(ロ) 知力十分にありて其上に活動も十分なので考へた上で十分自分で活動する。シーザー、秀吉は

此類の人である。

三、冷淡的氣質 之はあまり感動もせず活動も扣目なのである。

(イ) 知情意のはたらきが少いもの。

(ロ) 知力はあり情意はあまりはたらかず冷淡なので専門學の學者などにかやうな氣質がある。活動を好まず書でも讀で居る如きものである。フラン

クリンなどは此例で必要に迫られると活動するがなるべく出過ぎぬやうにするのである。

以上感動的活動的冷淡的の三は簡短であるが此三

では表はしきれぬ複雑なのを表はす爲に以下に舉げるやうな補をする。

四、感動的兼活動的氣質　之は感動も強く活動もするのである。婦人などには随分あるのでよく感じよく働く。良き例はルーテル、日蓮、などのやうに非常に感じて社會上大事業をするのである。但し悪く行て知力足らずに此性になると下等社會の人間の常に喧嘩して居るやうなものになる。

五、冷淡的兼活動的氣質　冷淡と活動といふ正に相反したやうな性質を備へたものがある。たとへば神社佛閣で行をして居る大人などは落付て冷淡に構へて而して行といふ働をして居る即ち其事を十分熱心に強き意志を以てして居る。

六、冷淡的兼感動的氣質　平生は冷淡で時々感動すると活動する。但し其感動活動は永く續かず。

勉強しても三日坊主で直ぐ止める人間などは此類で子供にしてもアキツポイ兒である。

七、調和的氣質　之は實際あるかどうか分らぬが若しあつたならば圓滿で何方にも偏せず知情意が皆よく働くのであるから教育上の氣質として之に近かしめんと望を有つべきである。

古來のやうに四に氣質を分けるよりは今述べたやうにする方が精密であると思ふ。此どれにも入らぬのは病的なのである。

氣質に付て教育上に注意すべき事を擧げて見ると調和的氣質に近づかしむる事は理想である。道徳上の修行のつみし人は之に近い氣質になる。又幼児は其境遇の變化、教育法等に由りて幾分か氣質をなはしてゆく事ができる。殊に友人間の勢力に由て感化するのは最も効力がある。

冷淡的の氣質は極端になりて失敗する憂はないが熱心でないのが欠點であるから熱心になるやうに導かねばならぬ。

感動的の者は同じ訓戒でも直ぐ強く感ずる故に割合に弱くてよろしい。之に反して活動的冷淡的のは強くする必要がある。

感動的の兒には活動を多くやらせるがよろし一體氣質の組織をよく考へて之に相應適當した訓練法を施すべきである。又氣質と身体はよほど關係があるから生理状態によほど注意すべきである。

自然物の色

かはひら

木の葉を見ますと滴らなばかりの緑の色で白百合の花は飽くまでも氣高く眞白である、又中には

美しき紅の者もあればゆかしき紫のものもある、或はまた是等の種々の色が相混して一つの色をなして居るものもある、かく自然界に於けるものにも色々々に其色が違うて居りまするが之は何が原因となりて居るのでありませうか、どういふ譯で木の葉が緑に見え、白百合の花は眞白に見ゆるのでありませう、之を説明しまする前に少しく一二の事柄を前に説き明かして置く必要があります。

一體、物の見えるといふとはどういふことかといふに太陽の光(電氣燈、らんぷ等の光は除外して)が物に當りて之が復び目に達するからであつて苟も光がなければ物が見えない。月も星も出て居らぬ夜には、光線が極めて少ないから、殆んど少しも人間には物が見えない、月が出て居るとか星が出て居るとか少しでも光があれば幾何か物が見え

るが、まだ／＼畫の様には能く見えない、畫には太陽の光線が充分に來て居るから能く見える、之れで物の認めらるるといふことの爲めには光線の存在といふことが必要であるといふことが分つたが、然し太陽の光線が無色（白色といふも同じ）であるにも拘はらず、物が青く見えたり、白く見えたり、赤く見えたりするのは何の爲めでありませうか、吾々は雨降りの後などに鮮やかに美しい弧状の色彩を天空の一方に認めることがある、これ云ふまでもなく虹である、また朝早く起きて木の葉や草花の上に置いて居る露を見ますると、朝日に映じてさら／＼と輝いて居る、之は何の爲めかといふに太陽の光が水滴にあたりて屈折反射の爲めに分解せられて色を現はすのであるといふことは皆よく人の知つて居る處である、是等は自然

界に現はるゝ現象でありますが人工的にも亦之を示すことが出来る、即ち暗室にて極めて狭い空隙から來る太陽の光線を、硝子の三角稜に受けて之を白壁の上か又は白い紙襖の上に映すときは矢張り虹に見える様な美しい色が見える、是等によりて太陽の光が只一つの色から出來て居る者でなくして、種々の色の集合から出來て居るものであるといふことが分る、其色の數は大体七つであつて赤、橙、黄、綠、青、藍、桔梗である、此太陽の光が三角稜に當り其中を通るときに色によりて屈折の割合が違つて居るから一緒に伴うて行くことが出来ないで自分勝手に銘々の道筋を通し銘々の色を現はすのである、であるから此分れた色をある仕掛けで一緒に集めるとまた元の無色となつて仕舞う、是れで太陽の光線が太凡七つの色の結合

から成り立つて居るといふことが分りましたが、然しこれに物が當つた時になせ殊に赤のみ或は殊に緑のみの色が見えて他の色が見えないのでありませうか。之れが即ち吸収及び反射の現象の爲めであります、白いものは凡ての色を盡く吸収するものである、黒いものは凡ての色を盡く吸収するものである、無色透明なるものは凡ての色を盡く通過するものである、今青い硝子板を通して白紙又は白壁を見るに青く見える、白壁又は白紙は凡ての色を盡く反射するものなるに拘はらず殊に青い色のみ見える譯は此青硝子は青以外の色を盡く吸収して只青色のみを通過せしむるものとなしなればならない、赤い硝子板にて白紙を見て赤く見えるのも全じわけで赤い色のみを通過し他の色を盡く吸収するからである、之により青色透明

なるものとは青色のみを通過する物体にして赤色透明なるものとは赤色のみを通過せしむる物体である。

緑礬の色が緑であるといふことは皆よく人の知る處である、今此緑礬の溶液（綠色透明即ち綠色のみを通過す）を作し之を内部を眞黒に塗り上部の開きたる器物に入れ之を上部から見るに眞暗に少しも元との緑色が見えない、然るにもし其中に少しでも白墨の白き粉末を入るゝと著しく緑に見える、これはどういふ譯であるか、緑礬の色は固より綠色で而も透明であるから其中を光が通るときは綠色以外の色は盡く吸収せられ只綠色のみが通過することを得べき筈である、然るに其器の内部は眞黒に塗つてあるから其爲めに其綠色まで吸収せられ遂に眞暗に見えるのである（もし器

内面の真暗でなければ其内面より緑色を反射する爲めに矢張り青く見ゆ。然るに之に白墨の粉末を入れたとすれば通過し得べき緑色が之に當りて四方八方に反射せられ之が目到達する爲めに著しく緑色を呈するのである、此白墨を入れぬ場合に於て液の表面から光が反射したに相違ないけれども何等の色を現はさないのを見れば是等の物体の示す色は表面より反射するのではなくして、光線が少しく内部に入り吸収の爲めに或る色のみが残り之が小物質等により反射せられ目に達するからであるといふことが分る

これで見えぬ葉の葉が緑に見える、白百合の花がなぜ白く見えるかといふことの説明が出来る事となる、木の葉の中には葉緑素といふ者があつて非常によく桔梗及び赤の色を吸収する者である、光

りが少しでも葉の中を通るときは最早充分に桔梗色と赤色とを失うて主に緑色の部分のみを残す、處が葉の内部の組織は極めて不規則にして丁度前の硫酸銅の溶液に白堊を入れたときの様な有様になつて居るから其緑色が之に當りて方々に反射せられ之が目到達して緑色に見えるのである、もし木葉中の組織が非常に規則正しく恰も彼の溶液の白堊を入れざるときの様な有様になつて居たならば通過光にては緑色に見ゆべきも反射光にては何等の色を認めず暗黒に見ゆべき筈である、白百合に於ても前者と異なる事なく矢張り内部から反射し来る色を認むるのである但此場合には或特別の色を吸収するといふ事はなく凡べての色を殆んど一様に反射する爲めに白色に見えるのである。

更に罌粟の花の赤色に見ゆるは其細胞中に殊に綠色及び青色を吸収し赤色を通過する溶液を含有し其赤色が反射せられて目に達するからである、以上は只或特段なるものにつきて述べたるか他の自然界に存する物体の色も之によりて多くは類推する事が出来ると思ふ、即ち光が物体に當るときは其幾部分は直ちに表面より反射し去るも他の幾部分は少しく物体内部に進入し茲に吸収反射の現象起り之が吾人の目に達して其色を認むる事となる、但し木葉の色にても多少濃淡の差違があるのは葉の種類により吸収の割合異なり、従て残れる色の割合も多少異り或は赤に近き部の色多く残り或は桔梗に近き色多く残る等により、結果たる緑色にも多少の差違を生ずるのである、これにより自然界に存する物体の色は多くは吸収に

伴ふ現象であることを述べたか、然し有らゆる物体の色が盡く皆之のみによりて起るといふ事は出来ない、否な全く之と性質を異にして居るものもある、金屬等の色が即ち之れてあつて黄金の色が黄色であるが、之は光が黄金の内部に入り吸収の現象起り黄色を反射せるにあらすして、光が全く黄金の内部に入ることなく、表面より直接に黄色を反射する爲めである、銅の赤色を帯びて居るも矢張り之と同じ事である、之を物理學上表面色と稱し、前の吸収によりて起るものと區別して居る、又物体によりては此表面色と吸収による者とを併有し双方混じて其物体の色を形作つて居るものもある、之はニコルのプリズムと云ふものを用ひて何れが表面色なるか何れが吸収によるものなるかを判別する事が出来る、



此他なほ色の事につきて研究するときは非常に面白
 白い事が幾らもある、例へば石鹼球をふくときは
 非常に美しき色を呈し、石油を水面上にこぼして
 も亦美しき色が見える、然し是等を説明するには
 稍々難いから茲には述べません、兎に角是等の色
 の根源も亦太陽より來る光線に因することを認め
 ば太陽は實に吾人の利用的方面に多大の影響を及
 ぼして居るのみならず、又吾人の美感的方面にも
 至大なる効果を與ふるものと云はなければならな
 い。

◎割烹 (まへのついき)

石井泰次郎

◎略製アイスクリームの拵方

○牛乳 四合 ○ザラメ砂糖 七十匁

右の合せたる物を、鍋にて、煮立つる、抄子な
 どにてかきまはし居るべし、たゞ煮たつほどに
 てよし

○鶏卵 十二個 ○牛乳 一匁

玉子を、一つづゝわりて、黄味のみを、鉢に入
 れ、白味は別に分けおくべし(白は用ひず)
 さて黄味の中に牛乳を入れて箸にて揆たて、
 よくまざりし時

○まへの牛乳の煮かへしたるを、人に鍋をも
 たせて

玉子をかきまはしながら、つぎいれざしむべし、

この時早くかきまはして居らねばあし、

次に其鍋のまゝ、火にかけて、なほかきまはし

一分間にして火よりあろして、別の鍋の上に、

毛篩をのせおき其中へつぎて、こしこむべし、

○右火にかけて、かきたつる時がむづかしき

なり、一分間より永くすれば、玉子かたまり

てあし、

次に大鍋などに水を入れて、其中にうかすやう

に、玉子のなべを入れて、そこよりひやしかく

べし、此間一時間

○鍋の水を一度とりかへてよし、

しかして、冷えたるを取上て、

○レモン油 十滴程

入れて、箸にてよくまぜて、茶を入れたる筒の

あきたる物、ブリツキ製の長さ七八寸、さしわ

たし四寸内位の丸きつゝに、玉子を入れて、ふ

たをして

○氷 二斤 ○鹽 六合 ○水

氷をくだきたるを二斤内と鹽六合位とを合せて

よくまぜたるを桶に入れながら、右のつゝを入

れて、めぐりを氷もてつめて、水を少し入れて、

筒をめぐらしはじむべし、さて片手にて、くる

くくと、氷の中のつゝをめぐらして、二分間た

ちたる時、ふたをとりて、中を木抄子などにて、

こきて、つゝのところを、つきたるをおとすや

うにして、まんなかと合せて、ふたをして、又

めぐらすべし、かくして、又二分間して、ふた

をとりて、木抄子にて中のふちにつきたるをお

として、まぜて、またふたをしてめぐらすべし

○此間に氷にあまり水おほくなりたるを、な

がしすて、あらたに水を加ふる事あるべし

かくて、鹽をも少しく加へて、めぐらすべし、

○右の如くする事、一時間以上にして、ふたをとりて、抄子にて、なかのをすくひて、うつはにもりて出すべし

◎略製スチューエックス拵方

○牛酪 ○牛乳 二合

牛酪を、少量と加して、其鍋の中へ、ウドン粉

メリケン十五匁位いれて、ねり合す、かたきほどに

ねりて鍋をゑろして、牛乳二合ほど入れて、よく

合せ鍋を火にかけて、箸を六七本よせて、持

て、これにてかきまはし、四分間位して、つよく

かきまはし、二分間して、ねろすべし、

さてべつのなべの中へ右の合せたるを入れて玉

子の黄味白味とも切りたるを

○切方は養ぬき玉子にしたるを、からを去りて三つ位にわがりにきりたるなり

これを別鍋に入れて、なべの(土鍋の平たく三四寸の深さの物)上面に、前の合せたるち、汁

の内をのこしねきたるをかけて、すりいもかけたる如くして、又玉子の切りたる中を三つ四つ、

黄味だけのこしをかきたるを(手篩にて、こして、粉にしたる物)ばらりとかけて、むしやきかま

どのなかに入れてやく、

○やく仕方は、すこし上つらにこげめつきたる位にてよろし

家庭に於ける所感

長野縣 飯塚忠次郎

(三) 未來の家庭

そこで此の二岐の家庭のお話を申して置けば、私

が今更ことわたらしくいはなくとも圓滿の家庭をつくらんことを、賢明なる皆さま方はきつとお思ひでしよう、人として誰れしも好き好んでわざわざ、不和な家庭をつくる者は御座いませぬ、何故に世間には圓滿な美しい家庭がすくないのでありましようか、よくよく推考してまゐりますと、よつて来る所は、其家の人々の心一つでどうでもなるので御座います、それを不和なる家庭であつてもたうはべばかりかざつて、現在生存してゐる人の多いのには慨嘆にたえませぬ、私はそれで事たれりとしてゐる人はないでしようと思ひます、さらばなぜに家庭を清くしないかといふ問題は自然起つてまゐりますが、それには色々な事柄が含有してゐるのであつて、其くはしいことはあとで述べたてることとして、やさしく、こくわかりやす

く、申せばまだまだ多くの人の家庭思想がごく幼稚であるからだと思ひます、それはとにかく今日の家庭では到底満足することは出来ませぬ、或人は云ふかもしれぬ「なんだ、馬鹿馬鹿敷、人もたのみもしないのに、かたぐるしい、こむづかしい、家庭のことなにかへ、よけいな口ばしをだして」と、その様な人があつたとしたならば、まだまだ人間の天職本分をしらない無責任な人と云はなければなりませぬ、苟くも人類の一分子、此地球上に呱呱の産聲をあげて生れた以上は、世間の人がどういはうが自分でこれはよいことであるとみとめたならば、如何なる艱難をもいとはず盡すのが人間のつとめと思ひます、またこれだけの勇氣がなければ如何なる事業も成功することはできません、殊に家庭のことなどに於いては多言を要しま

せぬ、よく皆さん方の銳利なる二つの眼でもつて四方をみたらどんなでしよう、現在我國改良すべさみの幾何、曰く教育、宗教、家庭、と述べきたり書きさされたれば、その數の多さに驚くのみである、教育の本体如何、家庭の本体如何です、私だちをして只だ噫なる言葉を發せしむるのみであるとは何んとなさけないでは御座いませんか、嗚呼、將來良妻となり賢母となり夫となり主人となつて、家庭を取扱ふ世間一般の人々は、何卒研究に研究をかされ經驗に經驗をつんで、現時我が暗黒なる家庭の上に一道の光明を與へ、其主義を鼓吹し普及して行つたなら、早晚我が國の家庭は全く一致され美化されて爛熳たるよろこびの花は咲きみちることは毫も疑ふべからざる事實と思ふのであります、此様な美しい家庭が軒を並べて社會にみちみ

ちたならば、日本は所謂天上の樂園となつてしまふ、然し其様になるまでは前途甚だ遠遠で御座います、圓滿なる美しい神聖なる家庭が集つて立派な村、町、市、國、が建設せられ以て立派なる國民が生れるのであると云ふことがらを深く記憶していただきますのであります。

(四) 家庭の分類

家庭と云ふものは如何なる組織に依つてかたちづけられてるか、一男一女が集つて一家をつくる之を稱して家庭と云ふので、英語でホームなるものである、然し此家庭の組立には色々ある、夫婦のみのもあれば、夫婦、小兒、下女、下男、等よりなるものも御座いまして、いちいち指示するとは出来ないが、一般の組織はまづこんなものであると思ひます、貴賤貧富を論ぜす一つの家庭が集つ

て一村をなし、一町をなし、一市、一國、世界もかたちづくるのであるから、各自の家庭が圓滿に美しくなれば自然と清き町、村、市、國、世界、もつくることが出来得ると思ふのです、是は只に自家の幸福のみならず國家の榮え行く基礎で御座います、そこで此の家庭を三種に分類することができ、即ち上、中、下、と従つて社會も上流、中流、下流、にわかれてこなければなりません、そこではじめて上流の家庭、中流の家庭、下流の家庭と云ふ名稱がで、まゐります、左に三家庭に就いてすこし述べてみましょう。

(一) 上流の家庭、とは主に富貴なる人々の集合に依つて組織せられたる家庭を指示するのである、一例をひいて申そうなら岩崎とか三井とか言ふ家庭の一団体に依つて成立した交際の激烈な家風の何

となく艶美な整頓した家庭、然し華美に流れる風習のあるのは大なる缺點であらう。

(二) 中流の家庭、とは一般に富ならず貴ならず、即ち普通の人々の集合に依つて組織せられたる家庭である、即ち普通の人々の集合に依つて組織せられたる家庭です、そうして悲しいことには誠に缺點のありがちな家庭で最も大なる缺點とも申すことは、不和の多いのです。

(三) 下流の家庭、とは其多くは貧賤なる人々の集合に依つて、できてゐる家庭で朝はやくから出て星をいただいて歸へると云ふ労働者が多い、且つ共同一致してかせぐと云ふ風があるは何より嬉しいことで、中流の家庭に比すると不束ながらも不和な家庭がすくない様に思はれるのです、只だ缺點とするところは「氏よりそだち」とも申そうか、

風習、言語、がまことに卑しいことはどうしても
まぬかれませぬ、如何となればその多くは無教育
者が多數をしめてゐるからで御座います。(未完)

雑感

在東京盲啞學校 平岩繁治

一 子供母の体内より生れて此の娑婆に出ると同時に即ち赤子時代から命令を奉ぜる習慣を養成する事は最も必要な事と思ひます。

その若し命令を奉ずる觀念なき時は、子供は自然知らずくの間
に我が儘になりまして、後には父母の命令を始め、一切の命令を
用ひぬえりになります。その始めには二つの命令は一つ奉じ三つ
の者は二つとゆへ風にだんだんと命令は皆奉ぜずとも能き者又は
奉ぜぬとも父母は用捨してくれるものでであると云ふ觀念増長
し、成人するに従ひて追々命令を用ひぬえりになつて遂に學校に
行く様になつても、其の漸消へないで學校の命令もあまり用ひず
なりて、後には、つまり其の子の不幸且つ父母に對して孝行とこ
ろではない、却つて不孝となり善にも捧げにもかゝらぬ様になりま
す、尙ほ成人して後一定の仕事も思ふ様に手につかず、或は社會

の命令及諸規則等も遵奉せぬ様になるのであるから、其の養育
の任に當つて居るものは務めて「オギヤー」と生れ出た赤子時代か
ら凡て命令約束等は奉ずるものであるとゆへ念を起さしめて生
涯の習慣となる様保護感化訓練上大に注意せねばならぬ事と思ひ
ます。

二 子供には惜まず食物を與へよ。これは無暗に間食させよと云
ふのではありません。一定の時に於て與へよといふのであります
例へば朝晝晩の三度は勿論であるが天真爛漫活動性に富める子供
に三度丈では足らぬ感があります、全体子供と云ふ者は生理上
消化上から見ても食を欲するは自然の勢なれば三度の食事の間
に於て規則正しく與へる方宜しく思ひます。特に子供が授業後
學校から歸へつて來ました時は、父母其の他の人等も其れを待つ
て居て歸り來たならば直ぐ御膳を出して(サー)御喰へよといふ
様にした方が宜しと思ふ、斯くする時は種々な利益があると思ふ
(子供から御母さん腹がへりました何か頂戴と催促されない中に
與へるのであります)即ちつまらない買喰(菓子餅等)も止むたら
う、又みだりに他人の物を慾しがらない様になる即ち慾ぼる心を
ふせぐことが出來ます。又學校の往復に子供は道草を喰ふて居る
が其れも自然に止んで來る、友人の家等に遊びに出かけても一定
の時間が來ると歸へつて來る、又は子供の中は慾の深いものであ

る、例へば食物なれば無理に一度に澤山喰へるとか、又は興へられたものを誰にも興へず、慾ばりて貯へておくよゝな事はおゝ見受けるところでありませう、此れ等も別段骨を折らなくてもふせぐことが出来ると思ひます。

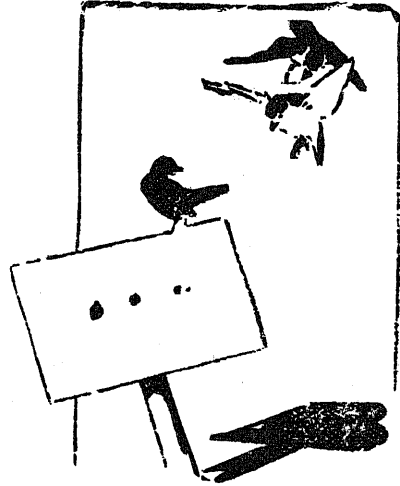
右の如くして充分に喰はせ而して充分に活動させる時は營養自然に完全になつて体格肥へ其の上活潑元氣ある生きくとした状態となりて食慾を忘れて運動もし勉強もする様になつて何となく無心にして理想的の子供の様に見へるだろーと思ひます

尙ほ三度の間に興へるものはなるべく「パン」類が尤も能いと思ひます、是れは私が申すまでもなくお醫者さん等も子供の衛生上一番よいと云ふて居られます

There is no riches above a sound body, and no joy above the joy of the heart.

健全なる身體に勝る富なく心の喜に勝る喜なし

和歌七首



佐々木信綱

無花果の廣葉の上のかたつむり

ところ得顔に角いだしたる

迎へられて昔の友は歸りきぬ

音ながらにわれは掉とる

雪の山天にそびえてさみどりの

牧場はるかに若駒わそぶ

にぎはしき村の祭の中過ぎて

悲しくなりぬ我がひとり旅

君がめでし白き桔梗をたむくれと

君ものいはす墓のつめたき

一しきり百舌啼きたてゝ霜かれの

林の奥に日はかたふきぬ

長閑なる村の夕べや子は家に

鳥はねくらに家に烟の

瀧廉太郎の君の一週忌に

東くめ子

峯の松風

もろとも

妙なるしるべ

かなでつる

瀧のしら糸

たえはてゝ

名のみ残るも はかなしや

かたみの曲を とりいてゝ

ビヤノによれば たちまちに

くしくもひやく 樂の音は

君かむかしの しらべなり

さくにえたえぬ わがこゝろ

ひく手も胸も 亂るゝに

ゆめかわらぬか まはろしの

見ゆるぞうせし 友の面影

松島に遊びて紅蓮女が

をを思ふ

小林雨峰

かつて芭蕉がみちのくの記に詠はれし松島の奇勝は、われの常に東北に遊ぶ毎に、神飛魂往せさ

るとなかりき、去年の夏またもや遂に空しく看過して、遠くく北海の天にさすらひしが、今年はよしなき事のありて、われは松島の奇勝に接するの機会に接しぬ、

されどく日本三景の一と稱へられ、幾たび天下の詩人墨客の水莖のあとに描かれたるこ、松島の奇勝、今われ秃筆を驅りて、其が全豹を寫さんも、恐くは美神の呪咀をや受けむ、われは別に感懐に映りしものあるなり、讀む人わが松島の奇勝を説かざるを怪み給ふなかれ、

仙臺に一夜を明かしわくる日ふりしきる雨を犯して、松島驛よりゆきて、海近き新富山の頂に攀ち上る、濛々たる煙雨あたり深く籠めて、夏尙は寒さを覺えつ、灣内を眺むれば、かしここ、皆な淡灰色の如き衣につまれたらんが如く、煙巒

の姿、雨島の影、悉くわか眼を遮りて、例へば七重八重にたて籠めたる簾の中なる美人の姿をかいまむに似て遺憾之に過ぎたるはなかりき、一島二島、島の姿雨のたえまよりちらはらと見ゆれども油繪の如き群島のそれとしるく見えかねしはいかに心のこりせられしぞ、われはたい雨中島影の麗なるを眺めて、この天下の奇勝に對して、憾を呑むも詮なかりき、

山を下りて雨にそはちし裳をか、げ海の岸を辿り、翠松蟠窟の如く蟠まれる五大堂の畔に休む、曾つて稻舟女史が筆に上りし迹を想ひ、かくて其のつれなき女詩人がはかなき最後を遂けつ、世を怨み、人を呪ひ、惜しき命を海底の藻屑と共に失せしめし、其の因縁の憐なるを想ひ出で、去つては瑞巖禪寺の法窟に獨眼龍政宗公の雄圖を察し、

門を出て、觀瀾亭の邊に全島の奇勝を瞰下す、詩興頓に湧起せらるゝものありき、

されど、われは全島の奇勝が如何にわが眼底に映するも、われは是を以て満足するにはあまりに堪へぬなり、徐ろに歩を運びて、われは紅蓮庵に少女紅蓮か遺跡を探りて、暫しわれはこゝに詩中の人となれり、

凡そ人の身の上の運命なるものは、何時如何なる事になりゆくものなるか、測るべからざるは人の身の上のそれなりかし、あはれ人生の一面を思へば海上の浮鷗に似たらすや、

紅蓮のあはれなる身の上を思ふ、予はこの風勝の絶群なるそれよりも、觀瀾亭にさびに寂びて、桃山の榮華の俤も一朝にして蕪ひし昔時の夢を辿らんよりも、あるは瑞巖の禪窟に、ありし法師が

悟達の迹を考ふるよりも、われにとりては紅蓮の事蹟のいかにわが胸に迫りて切哀の念を高めしぞ
街道の東側、觀瀾亭邊の小宇、今は軒破れて門扉傾き、雜草苔に埋れてたゞ寂寞、雨悲み風荒むの處、濤聲宛も悲嘆の聲の如きのあたり、實にこれ紅蓮が庵の存するところとなす、

曾てわが友樵村は落飾の美觀なる一文を草して悲哀の快感を説きしをありしが、われは今紅蓮の事を思ふてまた樵村と同じ感に撲れぬ、

紅蓮の人となりは詳しからず、一基の石ぶみを摩して悲哀なる人の俤を偲ぶに、紅蓮は羽前商家の娘なりしが、長して既に他に嫁するの約整ひしが、幾多の事情は遂に良人の死を招きさては紅蓮は世に背き、人に背きたゞ良人の昔を思ふて此處松島の假りの庵に住みわぶとの慕なき事となり

しなりとぞ、

庵前に一株の梅樹あり『軒端の梅』とぞ誌されけり、嵯峨たる枝は幾條に交はり、鹽風に荒める苦は青く錆びて、老幹殆んど百年あまりの星霜を經たらむか、と思はる、案内の老媪は梅樹の因縁を語りていふ、

「この梅樹こそはこの紅蓮の良人なる某が植えたるものなりしが、紅蓮こゝに住へるとき、既に、わが良人なる人の死にうせてありければ、はやこの梅の花咲きたりとして何かせむと、一首の國歌を讀み出てたれば、それよりは梅咲かずなりぬ」と、物語は極めて簡なればつばらなるとは知れ難けれども、年若うして最愛の良人に別れて、落飾入道、世の榮華を見ると脱履のそれよりも軽く、あらゆる愛着のさづなを斷じて、ひたふるにみ佛の

道を仰きて、良人の菩提をこの小庵に營み、こゝに一生を送りしと悲むべからずや、

半ば枯れかゝりし梅樹に對すれば、かの國歌によりて咲かずなりしと云ふ風情の如何にゆかしき詩味を存するか、試に冥想し來れば生命をつくして厚く且つ濃き愛情を灑ぎたりしかのが良人の死の淵に失せしとの刹那、如何に紅蓮は悲みの情に撲たれしぞ、世のあらゆるものは愛慕の情に勝りて何物も如くべきものゝ存せざれば、

見よソロモンの榮華の極も、この愛情の力の前には、何等のオーソリチーがあるべき千びきの巖も何かせん、況んや四季折々に咲き出づる花の數々句ふとも、紅蓮が眼には何の樂をか捧ぐるに足るべき、梅の花咲かずもあれと謠ひし情の奥底に潜めるうちに何物をか藏せるかを想像せよ、純

淨潔白の愛の滴り以外に何物かあるべき、げにや
 あらゆる女子の生命は愛情の外に何等の力をも有
 せざるなり、

さわれこ、宇宙の宏大も一塊の塵よりも小と見ら
 れ、千万金の富貴、智識、虚名、其他あらゆるも
 の何を以てこの紅蓮をして満足せしむべき、

紅蓮は既にこの愛情を注ぐべきの對手を失ふ、
 花に泣き、月に泣き、風に雨に泣かざるなきの情
 緒となるの止むなきをいかにせん、われは此の純
 淨の愛情を偲びて其の可憐の境遇を傷まざるを得
 ず、

人は落飾の風を以て厭世の感化と嘲ける、厭世
 の情や必ずしも可なるにわらず、されとく紅蓮
 の如きは既に抱ける純淨の愛、潔白の情、今既に
 施すべき天地を見出すと能はずなりたるを如何せ

ん、たいそれ、

こゝに女子の本性の宿れるを見ずや、こゝに悲
 哀の美神の住せるを思はずや、かくの如くに想ひ
 出たせしわれは、この松島の勝境に遊びて、この
 悲哀なる故事を追ふ、更らに世の人の多くはこの
 風景の優美を説きて、この可憐の少女が閱歴を説
 くなし、怪しからずや、

われはかくて今、紅蓮の小庵を廻り、眼を放
 つて灣内を望む、煙雨漸く薄らさ、翠蓋をかさせ
 る島嶼の影、海に浮き出づるものこゝかしこ、鷗
 二羽三羽軽やかに飛びかふあたり、しかも紅蓮は
 この仙境に背きて永へに眠れるなり、憐れならず
 や、

世の心ある人、來りて此の勝境を踏まんものは、
 一たび脚を紅蓮の小庵に運べ、梅樹影暗く、軒端

に聳え、門扉うらさびて風雨にさらされ、破庵軒
傾きてまた経聲の聞ゆるなきの處、苔むせる石碑
に對して、紅蓮の事を思は、幽魂髣髴として降
下するものわらん、
(七月十五日)

○フレール會俳句端書集

- 一、課題 秋季雜吟一人十句以下
- 一、べ切 八月二十五日限り
- 一、披露 十月發行本誌文苑欄
- 一、賞品 天人三座には美景を呈す
- 一、撰者 當分本會の撰とす
- 一、投稿 本誌講讀者は何人にてても投稿することを得、用紙は端書に限り(可成繪端書に記載せられたし)住所氏名雅號を明記し都合上必ず左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレール會俳句掛

塩野 奇 零

○第一回俳句端書集

- 山里に平和を唄ふ田植かな 釜山 木戸 笹舟
- 馬曳て歸る野道や飛ぶ螢 同
- 川形に流れを亂す螢かな 仙臺 立花 一瓢
- 白牡丹誠の色を咲きにけり 同
- 戀ならで月に恨みや螢狩 長野 蘿月庵天真
- 馬借りた禮に手傳ふ田植かな 同
- 箆笠に老をかくして田植かな 同
- 蝶も羽を伏せて落付く牡丹哉 東京 福島 松水
- 檜柏子の彼方此方や夏の月 釜山 阿比留藤子
- 早乙女の手拭白き揃ひかな 同
- 牡丹散て暫し花壇の別れ哉 東京 久米 辰子

夕立や人様々の逃げ仕度

同

植える田や老も若さも一人前

陸奥 須藤美佐雄

夕風に螢おちけり江のあなた

同

夕立や日傘手にして軒の下

愛知 杉山まつ子

うか〜と夜を更しよか夏なつの月

福岡 鈴木ひで子

夕立や罪なき馬を叱り行く

山梨 森岡 中子

開く香に夜隈離るゝ牡丹哉

名古屋 津村しづえ

子を抱て届かぬとこや飛ぶ螢

伊豆 平山やす子

暮色の螢に見ゆる小村かな

安藝 野村 滄洲

戦捷の嘶に更けつ夏の月

神奈川 杉崎 雲濤

川添や人去て只螢とぶ

長門 内田 桂崖

灯の消た儘にしてあり夏の月

伊豫 中島 肱山

舟やれば舟の上とぶ螢かな

同

見つけては又失ひり飛ぶ螢

武州 山田 達磨

舟に散る潮の花や夏の月

里の家茶友

波蹴て進む皇艦みづなみや夏の月

帶津 善亮

夕立や濡ながら行く植木賣

東京 佐藤 露子

餘念なく螢呼ぶ子や村外れ

横濱 山本富美子

河岸筋は柳にくらし夏の月

埼玉 新井 文冠

門々に高き話や夏の月

群馬 小池 貞子

笹の葉のゆれ込窓や夏の月

長野 吐 月 庵

橋越て茶屋も出来たり夏の月

上野 横山 清女

蝶一つ抱て夜に入る牡丹かな

同

四君子に耻ぬ色香や白牡丹

同

○三 光

人、舩ふねに征露の吟や夏の月

東京 久米 辰子

地、笠一つ殖殖にて賑ふ田植哉

仙臺 立花 一瓢

天、星消けて螢飛けり池の上

釜山 鹽谷 柴煙

○追 加

無一庵奇零

芍薬も序にはめつ白牡丹

軒添や小雨降る夜を飛ぶ螢
植付ける小溝のへりや餘り苗
鯉刻ねて影崩しけり夏の月
夕立や晴れた野末に草の月

海水浴に就きて

人間が海水浴をするに何故効能がありませるか、
これはよく患者から質問せられる事だ。私は常
にかやうな質問に會た時には次の如くに答へる。
即ち海水は絶えず波動があつて靜かに動かさず止つて
居るといふことがないから恰も機械力同様の作用
を以て身体に刺戟を與へる、それが爲に血液の循
環を盛んにするそれに海濱の空氣は誠に清淨で市
街の汚れた空氣などは兎ても比較にならない、
この清淨な空氣が充満して居る海濱に日常の業務を

抛つて安逸に一日なり二日なり保養するのは恰度
長の冬の日を薄暗がりの小屋の中に繋がれて居た
羊が、夏草の青々として滴るゝやうな廣い涼しい
牧場に放たれゝやうなもので、前數日、又は數十
日の苦しい務をこの二日三日で取返す事となるの
ですそれにこの海水浴はある病人を除く外、大概
の人間に餘り差支へのないもので、それが亦一般
普通に能く行はれ易い理由ともなつたのでせう。
入浴の時期はわが邦にありましては大抵七八九の
三ヶ月を最も適當なものとせられてあります、
もし浴場の設備さへ整頓して居る場所、殊に多
血質の人であれば六月より以前でも亦九月より以
後でも決して差支へのあるものではありませぬ。
然し茲に鳥渡御注意致したいのは過度の入浴は各
種の害を生ずること、浴後の頭痛、内臓の充血、又

身体に悪寒を生じて一種の不快を感じるのは、凡て過度の入浴の爲であります。それに又入浴前には決して酒、焼酎と言たやうな興奮劑を用ひてはならない、興奮劑を用ひて入浴すると一時は精神の爽快を覺ゆるけれど体温を放散することが多いから浴後に非常な衰弱を覺えます。

又入浴の日數は人に依て一定はしないが普通三四週間を以て最も適當なものとせられてゐる、始めて入浴するものは最初攝氏十九度位の溫度から段下つて行つて十七度位の溫度のところまで先づ一日に一回三分間から五分間、最も熟練したものであるが長くて十分間を超えてはならない、十分以上の入浴は如何なる場合にも利はなく、害があります。一日の中入浴に適した時刻は強壯の者で午前七時前後、午後六七時前後、即ち太陽の將に登らんとす

る時と太陽の没せんとする時とで、もし貧血のものだと海水が暖かになつた午後四時頃が最も適當であります。

婦人の入浴者で注意すべきことは月經のある時です、この時期には何うしても入浴をしては不可なり、それに男女に限らず神經系統の餘り鋭敏なもの是一般に入浴を禁ずるのが例であります。食後直に入浴すること、これは極めて悪いことであつて今迄にも随分注意がしてゐるにも拘らず能く到處に行はれて居るのは嘆かましい次第で御座います、尠くも一時間を経なければ決して入浴は出來ないものと思つて戴きたい。

これ迄の習慣によりますと餘り重い病人の海水浴をするといふことは耳にしませぬが、病氣次第で病人の入浴は必ずしも不可であるとは言はれませ

せん、肺結核患者などは大抵差支へはないものとしてある、然し餘り熱度の高いものや、身体の疲勞の甚しいもの、又は餘り海水の波動の激しいところなどでは入浴をせない方がよろしい、這麼時這麼場所で強て入浴すると肺に充血を來して不意に咯血を起すやうな事になる恐れがある。それよりも海水を手拭に浸して身体を拭淨するか又は潮風呂として入浴する法が勝れる仕方であります。腦病患者、これも一向差支へがない、この患者にあつては特に風景絶美の濱邊を選ひと、一方風致上から神經を緩和にする間接の効能があつて至極宜しい。腺病質の小兒、この患者に海水浴は缺くべからざるものであつて何うしても入浴せしめなければならぬ、この病氣は打捨てふくと成長の後大概は結核症の諸病を煩つて夭折する、死な

い迄も病毒を子孫に遺傳して飛でもない災害を生ずる素となるから充分注意して小兒時代に全快さして置ねばならぬ、それには海水浴が一等であります。腎臟並に膀胱患者は病中よりも却て病後の回復期が入浴に適するので、その時期を見る必要がありませぬ。心臟病患者は非常な注意をせないと能く游泳中不意に心臟麻痺で以て溺死する恐れがある、海水浴は差支へないが成べく游泳をせないやうにして淺瀬でボチャ／＼やるに限るのです。皮膚病の病症に依て入浴して可いものと悪いものとがあるから必ず醫師に聞糺さなければならぬ。妊婦も亦さうです、婦人科専門の醫師に就て充分の差圖を受けて貰ひたい。

以上の注意を充分に心得て置いて、偕この夏期に海水浴を行はれたなれば諸君は必ず來るべき秋冬の

候らうにおいて必然ひつぜんの効果くわを收め得られるでせう。即ち皮膚ひふが強堅きやうけんになるから冬期火燧ふゆかに入る様な情なさけ心こころも出いでず、随したがつて感胃かんいにかゝる恐れおそれがないから咳嗽きせきの爲ために呼吸器病きそくきも患うれふこともない、胃いは無暗むいに強つよくなつて消化せうかの困難くわんなんを訴うたへることがないばかりか、精神せいしんは爽快そうくわいに頭腦づのうは透明とうめいになるに連つれて記憶きき力りきは増進ぞうしんする、殊ととに青年せいねんの男女だんじよは兎角とが頭痛づうづうを覺おぼえ易やすいものであるがこれも亦海水浴またかいすいよくの爲ために全治ぜんちして跡あとを斷たつことになりませう。かくても猶諸君なほしよんはこの好期こうきを逸いつして空しく一室しつちう中に座臥ざぐわせらるゝお心算こころずでせうか、何どうです。(大阪毎日新聞所載(下クトル緒方正清君講話)

貞一さだいちの日記にっき (明治三十六年五月三十一日生男兒)

その母

六月十一日 昨夜少しく熱あつめる様よう、おもひし故ゆゑ、

計はかれば卅七度八分なりき。今朝けさは、少し快よき様子ようすになれど、例れいの山本醫師やまもと いしの許もとに行く、初はじめては中々なかなか、いやがりて、醫師いしも、殆ほとんど手の付け様ようもなき位くらいなりしかども、時計とけいを出だして、見みせられしより、好物ぶつの事こととて頓とんに機嫌きげんなをりて、大人おとならしく、すまして、胸腹むねはらなど、丁寧ていねいなる診察しんさつをうく。

午前五時半起き午後七時眠る。晝寢二時半。

おもゆ、二回、乳、晝四回、夜一回。

六月十五日 毎日よろこびし、腰湯こしゆを。如何いかにしてか、今日けふはいやがり、たらひの中うちにつちたち、足あしふみのばして、少しもかゝめず、強いて座まらせんとすれば泣なき叫さけぶ、種々しゆしゆすかして、そこくにつかひをはる。何か氣きに入いらぬ事ことあれば、必かならず喰くひつくそれは大抵晴江たいてい はるえさん(貞一さだいちの從姉)に對しての場合多おほし。午前六時起き、午後六時眠る、晝寢、一時間。

かもゆ 二回、乳、晝三回、夜一回

六月十七日 乳をのみながら、父上ちやうへに、爪つめをとり

ていたゞく、少しも動かうごかず、中々大人なかなかおとなしく、終しまま

でとらせる、

父上ちやうへの書齋しよさいの、小き方ちいさほうのテーブルの下したに、はいこ

みその横木よこぎを、とらんと引張ひっぱる、

夕食後ゆうじか、父母ふぼに伴ともはれて、電車でんしゃを見みに行く、燈火とうか

美うつくしき、電車でんしゃの、馳はせ來きたるを見みるや、大聲おほさわを出だし

かどり上ありてよろこぶ。

午前七時きんねんしちじ卅分じゆふん起おき 午後九時きんねんくじ眠ねる 晝寢ひるね四十分

かもゆ 二回、乳、晝三回、夜二回

六月十九日 母ははとばあやに、つれられ、石野俊夫いしのとしを

さんの御家ごうちに遊あそびに行く、俊夫としをさんは、真ま一いちより

は、百日程ひちぼとろ兄あにさんなり、中々愛嬌なかなかあきさう者もので、愛想あいせよく

靴かもちやなど貸かして下くださる。どうしたのか、しま

ひには、一ひとのかもちやをとりわひして泣なき出だす、
俊としチャンの父様ちやうさんに抱だかれて、機嫌きげんなをる、他よその男おとこ
の人に 機嫌きげんよく抱だかれしは、今日けふ始はじめてなり、
しかも初對面しよたいめんの方かたに、

午前八時きんねんはちじ起おき 午後九時きんねんくじ眠ねる 晝寢ひるね 三時半じはん

かもゆ 二回、乳五回、夜一回

七月三日 父母ふぼに伴ともはれ、上野公園いづのこうえんに遊あそび、櫻木

町ちやうの鈴木氏すずきしを訪とふ、今年ことんねん九歳くさいになる、一いち郎らうさんと、

四歳さいになるいね子こさんと遊あそぶ、御庭ごにわの芝生しばふの上うへ

はだして立たたゝしてやれば、氣味きみわ悪わるるそうに、足

を上げあげる、初はじめの中なかは、はづかしがつて、母ははには

かり、よりかゝつて居まりしも、暫時せんじの内うちには、いね

子こさんの、帶おびをぐいとひつぼつて、よろゝくと倒たは

れさうにしたり、また顔かほをつかみに、行ゆかうとし

たり、すいぶん、いたづらをして母ははを困こまらす、

午前六時半起き、午後九時眠る、晝寝 一時間

ふもゆ二回 乳晝三回 夜二回

七月五日 今日より、朝起きて、母が學校へ行く

までの中に、飲ます乳を廢す、少しく機嫌悪かり

しも、母學校へ出し後は、大人しかりしと、

かゆ一回 ふもゆ二回 乳晝一回 夜一回

午前五時半起き 七時半眠る 晝寝二時間

七月八日 此の二三日 オンモといへば 直ちに

背中へ倚りかゝり、カー〜といへば、空中を指

す

どんなに、機嫌悪しき時でも、ビヤノを、弄ばせ

ると、直になをる、左の手は低き方なり、右の手

は、高き方より順に、一つづゝ鳴して、終には兩

手にて、ジャンといはせるのが、おさまりなり、

午前四時半起き 午後七時眠る 晝寝二時間

かゆ一回 ふもゆ二回 乳晝二回 夜一回

かゆには 鶏卵をませ ふもゆも一回は鶏卵一

回はかつをぶしの、スープをさせる、

七月十日 今日始めて、平放しにて二足三足歩

誕生後四十日目なり、此子は一體這ふ事も遅くて

「這はないですぐ歩き始めるのでせう」など言ひ

合ひ居る中に、いつか這ひ出し、夫より大方百日

目の今日、始めて歩み出せるなり。

七月十二日 始めて有意的に、玩具の笛をとりて

吹きては、人の顔を見て、得意らしく笑ふ

午前五時半起き 午後七時眠る

かゆ一回 ふもゆ二回 乳晝一回 夜二回

七月十四日 ばあやにおはれ、鶏卵を買ひに行き

しに、店先にて鶏卵を見つけるや否、すぐにくれ

と手を出して大さわぎするを、店の内儀竹の小さ

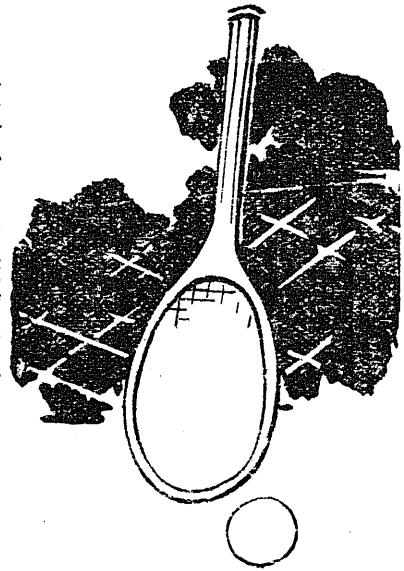
輪を、おもちゃにとてくれしにて、漸くまぢらり
れたり

午前六時半起き、午後七時半眠る

かゆ一回　おもゆ三回　乳晝　二回　夜一回

Let a child have its will and it will
not cry.

子供をして意の儘にせしめよ、然らば子供は泣かざる
べし。



女子高等師範學校附屬

幼稚園分室

一、保育の方法及成績の概要

(之は明治三十六年四月より三十七年三月に至
る一年間の記事なり、以下之に倣ふ)

幼児に對し、一個人としては心身健全活潑にして
從順正直誠實熱心忍耐勤勉親切獨立等の意育情
育に力めて之が實行を期し、下等社會に育つが爲

に有する惡徳不良の習慣を矯正し、又家庭の境遇上有する長處を大切に保存し、一、團躰としては長ずるに従ひ年齢相應の團躰中の個人としての責任義務、他に對する道徳、他と事を共にする愉快、協同一致の有力なる事等を知らしめ感ぜしめ行はしめん事を望み、三、年齢の異なる幼児の集合として考へては、年長者は幼者を愛撫し之が爲に盡すを以て樂みとし少者は年長者を敬愛して之に従ふといふ風に、言はば家庭に於ける兄弟長幼の關係の如くせん事を希ひ、四、知育の方面に付ては幼兒の有する思想を整頓誘導し之に適當なる丈の事柄に考を入れて積極的に知力の素地を培はん事を欲し、又都會の子供殊に下等社會の子供の通性通弊として世才的方面の發達は著しく進めるにも拘はらず頭腦的發達不秩序の者多く、即ち家庭にて

此方面に注意する丈の力兩親になき爲に幼兒の受くる智力の影響の欠けたるが多ければ之を補ひ、又其觀察知識嗜好趣味の人工物に偏して自然物に薄きを以て自然物に對する興味を惹起さしめ、又父兄が審美的思想欠乏せる爲に受けたる美的感情智識の不足を補はん爲に美育の方面に注意したり鳥津某男の伶俐銳敏統御の才ありて勢力強く衆兒之に従ふ事、茶谷某(男)鈴木某(女)が比較的圓滿に諸徳を具備したる優良なる人物にて隱然たる良感化の中心たりし事は何れも利用し善用して、衆兒をまとむる事、良影響を普及せしむる事に資したり、其結果衆兒の集合としての統一は比較的都合よく行き又二良兒の感化も陰に有力なるものありき。

なほ細かく此一年間の成績に付て記すに當り、前

記方針に由て分類して考ふるに慚愧に堪へざる點遺憾なる點少からず。

一、に付ては分室幼児は家庭の境遇上身体は多く強壯にして且つ自然に寒暑に對する鍛練を得たれば身体の健康は殆ど十分なり、但し營養は不良と言ふまでならずとも十分ならぬが多ければ、爲に頭腦の能力が体力に比例せりとは言ひ難し、個人の道德的訓練に付ては能ふ丈は盡したるつもりなれども、如何せん余一擔任保姆の徳淺さと教育力の不十分なるとは幼児に對して自ら希望する丈の良感化と訓練を與ふる能はず、且つ此一年間保姆の手の足らざりし爲、多人數の幼児に對して手の届かぬ點如何にも多く、日々を暮して行くに汲々とする爲に、良からぬ方に傾く兒を知りつゝ、早く十分に之が矯正をする能はず、又は積極的に養

ひたき徳を考へながら之を實行する力乏しく、爲に個人教育を十分にして所期せる總目を積極的に養成し、一人々々の惡徳を根本的に矯正する點に於て不十分なりしは深く自ら愧ぢ且つ謝する所なり。要するに此一年間個人教育の點に於て顧みて自ら満足する能はず。一月以後敎生の終日實地練習する爲に稍手の足る感ありしも時日短きと敎生より受くる幼児にとりて不幸なる影響と差引きてなほ喜ぶべき良果を見る能はざりしは遺憾とする所なり、

二、に付ては、前記の如く手の足らぬ場合には勢團躰として取扱はざるべからざる場合多く、之に對する徳を訓ふる機會多きに過ぐる位多きと、之をよく養はざれば立ち行き難きとに由りて比較的其徳はよく實行されたり。されども團躰として取

扱ふ場合多ければ規律従て多くなり年齢相應に個人的に扱ひたき場合にもそれ以上の年齢の兒と共に規律的共同的に扱はざるを得ざる場合多き爲に自然に團練の興味を悟るといふよりは此方より幾分か強ひる要求するといふ傾ありて、子供が全体として愉快になだらかにゆくといふ點に於て十分ならず。之は自由を土臺として保育してゆきたく望みながら事情上意の如くする能はざりしにも由る。要するに比較的規律を多くしたる結果なり。三、に付ては、年長兒を利用して幼者保護の任に當らしむる事は一方より言へば保姆の手を省く事にもなるを以て、此點は必要上より言ひても實行され、心身の有力は責任を意味する事を一方は悟り他は之を敬して其愛護を受くる長幼の關係は先づ殆ど望み點に近く達し得たりと考ふ。

四、に付ては、自然物に對する興味愛護の情のできる丈の範圍内に於て養ひ得たる結果、彼等の社會の幼兒としては割合に其思想感情を得たりと信ず。特に動物哀憐に付ては深く其考を入れ得たり。審美的思想の養成は餘力なかりし爲只出来る丈の事をしたるのみなると保姆自身美術的觀念に乏しきとに由りて其結果誠に不十分なり。頭腦的方面を練習整頓する事は手技其他隨時に注意したるも是亦手の足らぬ爲に体育德育よりはとかく後廻しにしたるより十分の事をする能はず、從て此方面の保育成績は所期せし點より遙かに遠きものと認む。

○此年度限りにて小學校に行くべき幼兒に對しては座席を小學校風にすする事、發言應答等の体裁に於て、小學校にて用ひらるゝ管理法の内此年齢の

幼兒に適せりと考ふる事柄は漸々實行し、特に手技其他室内の仕事に勤勉熱心ならしめん事を期したる結果、前年小學校に送りたる兒よりは稍々一齊教授を受くるに便利なる習慣を興へ得たるものゝ如し。

新入兒に對しては前年度の如く初はなるべく何事も随意にせしめ時間割を設けず、家庭にての生活の不規律なりしと急變なからしめん事を期したる結果、特別の者の外多數の幼兒は苦もなく世話なき幼稚園兒となりしせり。新入兒に對する入園當初の此方法は其結果に徴して心身發表の自然に従へるものなりと信ず。

市川君の批評に答ふ

東 基 吉

學友市川君は、其明晰なる判断力と、鋭利なる批評眼とを以て、夙に同人の間に鳴つて居らるのである。此頃拙著「幼稚園保育法」につきて、詳密なる批評を寄せられた。余は、本書に向つて此の如き注意を拂つて精讀せられた君の厚志に對して深く感謝し、更に本書の不明の箇所を一々指摘教示せられた事に依つて、懇切に余の蒙を啓かれた君の厚志に向つて、多大の感謝を表さなければならぬ、

君の余に向つての讃辭は敢て當らず、其批評せられた諸點は、一々緊背を得て、之に向つては又敢て云爲すべき所がないと思ふ。然も、尙一二辯すべき節のないでもないと思へるから、茲に一二言を記して君の厚意に酬いんと思ふのである。

一より四に至るまでの君の御論は、敢て異議を申

すべくもない、勿論本書は、序文にある通り、どこまでも斯道の専門家に示さんとして出来たものであるから非専門家たる母に向つては、餘り注意を拂はなかつた、それは、序文に申し述ぶる所のごとくである。實際専門家に示す所を以て「一層、適切なる家庭の讀物たらしめん」ことは、今日の場合、随分六ヶ敷い事だと思ふ。故に本書は、敢て適切な家庭の讀物ではないが、兎に角、幼稚園の何たるかを知らんが爲に幼稚園時代の保育の精神の何たるかを解せんがために、敢て世の母たる人の一讀を求めたのである。次に君は、批評の本論に入りて、幼稚園の必要の理由として余の述べたる「家庭に在りては、父母たる者悉く正しき理論に従ひ家庭教育の方法を實行する技倆を有すといふべからず」とあるを引きて「果して保姆は實

母より多く保育に適したるものなりや、少くとも現今の所謂、保姆なるもの、中に、幾人か世の父母よりもより多く保育の法に長けたりとなすべきものありや、これ最も疑はしきことなり」と述べられたれども、余は、總べての保姆が、總べての實母よりも保育に適し、保育の法に長けりとはいはず、父母はどれも彼れも、正しき理論に従つて子供を教育することか出来るとはいへないから、其出来ない者の爲には幼稚園が「入用だ」といったので、従つてか様な父母よりも、適良な保姆が保育の或部分に於ては確に優つて居るとはいへると思ふ。今日の保姆といはれるが、此の如き論題に於ては、一通り完全なるものを目標としてかゝらねばならぬ。(一三二頁保育者の資格参照)家庭教育と學校教育との聯關としての幼稚園に對する議論は

君のは頗る根本的である若し、其方案が確定しさへすれば、無論、此一項は必要とする理由にはならぬと思ふ。

次に、幼稚園保育に伴ふ弊害として、個性を害すること、病毒の傳染、惡風の傳播を擧げたのを批評せられた、勿論、心力過勞等に關する事は保育の要旨の章下に讓るのが便利だと思つたから、そこに載せた。而して、これ等の弊は君のいはれる通り從來の幼稚園に於てのみ見るべきでなく、今日の幼稚園に於ても見るべきであるに違ない、然し、今日に於ては多數の思慮ある保育者が、悉く從來の幼稚園に伴ふ之等の弊害を認めて、之が矯正に盡力するに至つた以上は、從來といつても敢て差支はなからうと思ふ、尙又、かゝる弊害は常に衆人教育に伴ふ必然の結果だとは、小生の信

じ得ない所で、個性の如きは、方法次第で、反つて衆人教育所に於てよく發達せられ様と思ふか如何に、

次に保育事項の中の談話の種類中に、對話の一項を加へては如何との説、至極御尤もと思ふ。但し君の所謂對話と小生の考ふる所とは、果して一致して居るかどうかは分らぬけれども、若し小生の考ふる所に同じであるならば、それは、事實談及寓發事項の談話に於て屢々行はれて居る一方法である、近來外國に於ても、幼稚園の談話は、子供達の日常生活の上につきての實際談、各自の經驗談の如きが重用せられる相だが、これが、君の所謂對話の材料ではないであらうか、遊戯と談話を結合することを得るといふ所につきては尙一層君の説明の勞を煩はしたい心地がせられる。恩物

につきては、近來既に定説あり、小生は、屢他

の雜誌にも小生の見なり、外國雜誌に散見する新説を紹介した。其議論の神秘的なるは、何人も疑惑を挾む所、従つて、其方法も此議論から割り出

された所から、現今でも尙随分、不合理的なり方

をやつて居るのは情ない話である。君の恩物に對

つて價値の疑ふべしとする第一點も、若し此議論

から割り出した方法に由ると、全く有理な疑問で

ある。夫から一体此恩物は、普氏が、雨中の徒然

の時子供を室内で遊ばせる折(晴天で都合のよい

時は大低郊外で遊ばせた)の玩具として與へたも

のだから、小細工のでもあり、且つ多くは机上の

てば、單に屬するのは當然のことで、従つて、保育者

が、單に恩物丈を尊重して他の保育の方便を顧

みないといふのは間違つた話で、宜しく祖師に倣

つて、恩物は室内的のものとして、別に室外に於

て、大に子供の活動性を満足せしめる方便を採用せんければならぬと思ふ。

其他遊園につきて君の述べられたる事ども、一々

時弊に適中した明言といはねばならぬ。

文辭に習はぬ所から、君の厚意に對して、或は禮

を失つた所がないかを恐れる、幸に寛容を祈るのである。

雜報

大阪市保育會

京坂神聯合保育會の一たる大阪市保育會は、會長に同市女子師範學校長大村芳樹氏、副會長に全校教諭杉山外世四郎氏當られ、全市幼稚園關係

者一同會員となりて組織せられ居るものにて、市の保育界に向つて貢献する所甚だ多く、有力なる市の教育上の一機關たるが、本年は、市を始め他の郡區に於ても、時局の爲め、一も講習會等の催なさに當り、尙且つ奮つて、保育の講習を開くと、なり、先月十五日より向ふ一週間、女子高等師範學校教授東基吉氏を聘して、保育法の講習を開きたり、會員は、大阪市に百三十名餘奈良京都神戸より十四五名、計百五十人許、午後一時より四時まで、日々の炎熱を物ともせず、何れも熱心聽講せられ、終りて會長より講習證書を授與せられたり、由來、小學校教師、中學校教師等の爲には、至る處、講習會等の催ありて、新知識、新思想の收得に便せしむる機關の設ありといへども、獨り幼稚園保育者のために、かゝる機會の設

けられざるは、甚だ遺憾とせし所にして、若し、幼稚園保育者の時代に後る、恐ありとせば、そは全く之に原因するものといふべきなり。大阪市保育會の早く此處に見て此舉ありたるまことに時弊に適中したるものといふべし。

會費領收 自明治卅七年七月一日 至全 七月廿四日

金額	年月日	姓名
五〇	三七、五	波多野とく
一〇	三八、五	桑原いはほ
三〇	三七、三	谷本 寛
五〇	三七、三	湯川さだ
五〇	三七、二	岡澤やへ
五〇	三七、二	外山 茂
六〇	三七、一	村川 愛
六〇	三六、六	柴田かつ
一〇〇	三七、八	今井千代子
六〇	三七、七	鈴木れい
三〇	三七、五	山岸たよ
二〇	三七、一	高安 晋妻

三〇	三七、一——三七、三	上池マカト
一〇〇	三六、一——三七、一〇	野尻てつ
一〇〇	三六、一——三七、一〇	小谷野千代
二〇	三七、五——三七、六	小原藤枝
六〇	三七、七——三七、一二	矢野かつ
一〇	三八、二	戸野みち
二〇	三七、五——三七、六	下村三四吉
一〇〇	三七、三——三七、一二	波佐谷みち
二〇	三七、三——三七、四	伊藤弘一
二〇	三七、五——三七、六	矢作てつ
二〇	三七、五——三七、六	後関菊野
二〇	三七、五——三七、六	西島富壽
二〇	三七、五——三七、六	今立裕
二〇	三七、五——三七、六	堀越源次郎
二〇	三七、五——三七、六	吉村千鶴
二〇	三七、五——三七、六	伊藤せい
六〇	三七、七——三七、一二	土井たま
一〇〇	三六、一——三七、八	永田けい
一〇〇	三七、一——三七、一〇	神通せき
一〇〇	三六、九——三七、六	岡田みつ
二〇	三七、五——三七、六	鳥居鍬三郎
二〇	三七、五——三七、六	大羽ひさ
二〇	三七、五——三七、六	南摩まき
二〇	三七、五——三七、六	山口西三郎

二〇	三七、五——三七、六	小池みつ
一〇〇	三六、七——三七、四	富岡龜門
二〇	三七、五——三七、六	高橋忠次郎
二〇	三七、五——三七、六	町田則文
二〇	三七、五——三七、六	喜多見佐喜
四〇	三七、三——三七、六	中村五六
二〇	三七、五——三七、六	斯波やす
二〇	三七、四——三七、八、三	岩瀬かよ
二〇	三七、四——三七、五	藤岡とき
一〇	三七、六	藤井とよ
一〇	三七、六	牧あさを
一〇	三七、六	鈴木きん
一〇	三七、六	田副つる
一〇	三七、六	土方ひさ
一〇	三七、六	渡邊のぶ
一〇	三七、六	酒井たね
一〇	三七、六	山下ふさ
五〇	三七、六——三七、一〇	西浦りつ
一〇〇	三七、一〇——三八、七	大塚さだ
五〇	三七、五——三七、九	尾田けい
二〇	三七、五——三七、六	神田順
二〇	三七、五——三七、六	谷田部じゆん
二〇	三七、五——三七、六	伊藤弘一
二〇	三七、五——三七、六	武田きん

二〇 三七、五—三七、六 立花 はる
 二〇 三七、五—三七、六 林 蝶
 二〇 三七、五—三七、六 佐伯 外浪
 一〇〇 三七、七—三八、四 秋山 恒子
 七〇 三六、四—三六、一〇 小々 高操
 二二〇 三七、一—三七、二二 町 田 孝
 七〇 三七、一—三七、七 西川 かめ
 一〇〇 三六、七—三七、五 鎌田 なか
 六〇 三七、四—三七、九 近藤 しげ

寄 附

一金貳圓 會員松村久子氏より本會雜誌部
 に寄附せらる(三十七年七月)

一金壹圓五拾錢 會員田中文字氏より本會雜誌部
 に寄附せらる(三十七年七月)

入 會

千葉縣千葉幼稚園

渡邊 うめ

陸前國桃生郡儂來村

右紹介東基舌 松浦 かめよ

長崎縣東彼杵郡日宇村小學校

右事務所申込 楠本 勝一

東京本郷區龍岡町一五

右事務所申込 松島 八重

右紹介田中ふみ

沖繩縣國頭郡羽地間切眞喜屋村一、

上地 マカト

大分縣大分郡野津原村

右事務所申込 矢野 ひつ

埼玉縣入間郡金子村大字中神

右紹介富田しげ 桑田 勝子

轉 居

女子高等師範學校へ

田淵 みす

京橋區京華小學校へ

忍田 ちよ

神戶市中岸七丁目番外十三番屋敷へ

波多野 あぐり

愛知縣知多郡龜崎幼稚園へ

山田 しう

千葉縣大原町松濤館へ

廣瀬 豐十郎

神田區駿河台鈴木町九番地へ

佐藤 むめ

本郷區三組町十七番地へ

鈴木 れい子

麴町區富士見町六ノ四

青戸 さく

京都市町荒神上ル宮垣町へ

相川 のぶ

本郷區春木町三ノ四〇成川方へ

高安 吾妻

日本橋區藥研町一〇藤井方へ

池田 その

下谷區下根岸一五

太田 とめ

本郷區駒込東片町一四小林方へ

川島 みつ

東京府第三高等女學校へ

永田 かい

兵庫縣明石女子師範學校へ

池袋 すが

改 姓

菊池 敦世

三十七年七月廿一日 會費領收 (第四卷第五號に
掲載すべき分の一部)

金額	年月	姓名
一一〇	三七、四	山田 ちよ
一一〇	三七、四	野口 ゆか
五〇	三七、四	安達 かつ
五〇	三七、二	高野 ちよ
一一〇	三七、五	奥野 まさ
六〇	三七、三	後藤 りん
一一〇	三七、四	田中 ふさ
一〇	三七、四	關 仁三郎
六〇	三七、四	小杉 さと
二〇	三七、四	柴岡 てる
二〇	三七、四	吉田 しう
六〇	三七、四	早川 いし
六〇	三七、四	安藤 ゆき
二四〇	三六、四	志村 たか
三〇	三七、二	小西 すみ
六〇	三七、三	内田 かね
六〇	三七、四	大橋 いぬ
六〇	三七、三	稻葉 かね

安野 改 伊藤 みち
田邊 改 安野 なか

一〇〇	三七、三	關 すが
五〇	三七、四	十文字 こと
六〇	三七、五	瀧澤 よう
六〇	三七、五	相賀 よし
六〇	三七、四	一色 とよ
一〇〇	三七、四	野澤 あい
五〇	三六、一	北野 はる
六〇	三六、一〇	大山 千代
三〇	三七、四	淺岡 はま
六〇	三七、四	成瀬 きよ
三〇	三七、四	山崎 いよ
一一〇	三七、四	松本 菊次郎
一一〇	三七、四	吉岡 美馬
一一〇	三七、四	吉住 幾江
六〇	三七、五	近藤 はま
一〇〇	三七、五	後藤 いと
一〇〇	三五、一	小西 信八
三〇	三七、四	福田 ふく
一〇〇	三六、七	吉澤 とも
一〇〇	三七、四	伊藤 いつき
三〇	三七、四	妹尾 明
五〇	三七、五	千葉 秀
五〇	三七、四	佐々木 まさみ

歌唱●遊戲の大寶典◎伴侶好の戲遊●歌唱

本書の
編纂は
何故？

- 一 唱歌及遊戲の種類多種多様其書亦多數全班を如るに困難なれば
- 一 唱歌及遊戲の教材地方に依り異にすべく且つ偏るべからざれば
- 一 良教材も古きは忘れられんとするに依新古に通ずる必要あれば
- 一 教材を活用する教授法及實際に當ての注意頗多且つ緊要なれば
- 一 所有書籍は集め難きを以て一目して之を知る便法の必要あれば

教授界
第貳卷
第八號

唱歌及遊戲教材提要

本書の
内容は
如何？

- 一 上篇は世に所有兩科書所載の者を學年學期に配當したる一覽表
- 一 中篇は東京遊戲法研究会諸講師の實驗されて適切なる新遊戲法
- 一 下篇は東京遊戲法研究会諸講師の獨特卓越巧妙なる實際教授法
- 一 篇外は兩科の實功を多大ならしむる諸大家の實際教授上の注意
- 一 幼稚園小學校女學校等には勿論夫以上の學校に於ても良參考書

本會は會員に
毎月一回教授
界を頒つ 八月
廿日迄に入會申込
者には二ヶ月分の
會費廿八錢(實費)
にて本書を頒つ

八月廿日發行

定價金卅五錢

郵税金六錢

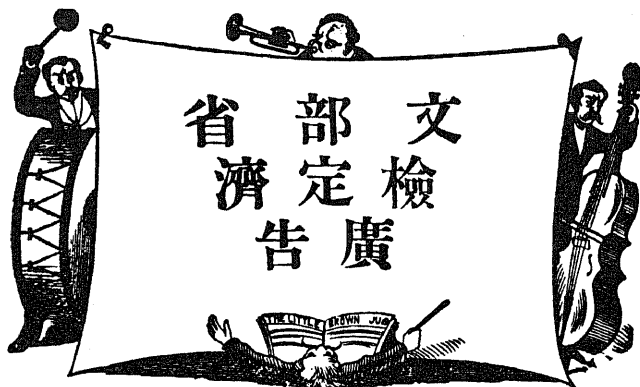
會費は前納壹
ヶ年金壹圓五
拾錢、六ヶ月
金八十錢、三
ヶ月金四十錢
錢雜誌は三錢
郵税壹錢五厘

會成研

東京町四丁目
市麴町
町區貳
飯番
田地

發行所

明治三十四年二月廿八日 第三種郵便物認可



省部文檢定廣告

發行以來唯一の完全な唱歌教科書と
 して非常な大喝采を博し僅々數月間に三版發行の盛運に會したる本書は今其生徒用教師用共に文部省の檢定を経て更らに其眞價を發輝するの榮を得たり
 従來文部省檢定済と
 して世に刊行せる唱歌集は皆悉く教師用即ち教師の参考書としのみ許可せられたるものに於ては實に本書其如何に該科の教授上完全なる良書たるかを知らるに足るべし

唱歌教科書

郵税一册に就き金四錢

教師用 第一卷定價金三十錢
 第二卷定價金三十錢
 第三卷定價金三十錢
 第四卷定價金三十錢
 生徒用 第一卷定價金十五錢
 第二卷定價金十五錢
 第三卷定價金十五錢
 第四卷定價金十五錢

空前の唱歌良教科書！
 檢定済生徒用唱歌教科書の嚆矢

洋琴 金參百圓以上 各種

ヴァイオリン 金五圓以上五拾圓迄 各種

鉛木製 八圓以上百五拾圓迄 各種

樂隊用樂器

大太鼓金貳拾圓以上小太鼓八圓半以上シンバル金四圓以上其他バス、バット、テナー、アルト、コルネット、トロンボン等金貳拾圓以上百六拾圓迄

鼓隊用樂器

太鼓金貳拾圓以上 横笛金壹圓以上
 ○學校用一組拾參圓

手風琴 金貳圓五拾錢以上 各種

保險 山葉風琴 定價金拾六圓五拾錢 以上金貳百圓迄

右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジヨレット其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

ピアノ、調律修繕

郵券貳錢 御送附目錄進呈